

海老名の「申」を訪ねる

園教育総務課 ☎(2335)4925

歩き慣れたいつもの道、見過ごしがちな古い石造物に目を向けると、そこには三猿が…。こゝには「申年」。干支の「申」にちなみ、猿が彫られている市内の「庚申塔」に注目しました。



▲三猿が特徴(柏ヶ谷)



▲静かに時を刻む庚申堂周辺(国分尼寺金堂跡)

NPO法人海老名ガイド協会 古道・石仏部会部会長 三澤武治さんに聞きました

庚申塔には像や猿が刻まれているものや、文字だけのもの、道しるべの役割をしていたものなど、さまざまな種類があります。刻まれている像は青面金剛が多く、市内では15基程あります。諸説ありますが、講を持つことや塔を建てることを広めたのは全国を旅する修験者や僧侶などの知識人層だったといわれています。同じ神奈川県内でも、三浦半島の方と海老名近辺では青面金剛の持っているものに違いがあるなど、いまだに庚申講や塔については解明されていないことも多いのですが、全国的に分布が見られ、特に関東地方には多いようです。

現在でも地域の皆さんによって管理されている庚申塔がある一方で、開発による道路拡張などにより、元々あった場所から移されているものも多くあります。道しるべの役割をしていたものなどは、移動してしまうと意味合いが分からなくなってしまうこともあるので少し残念ですが、先人の文化を知ることができる遺物でもあるので、大切にしていけたらと思いますね。



▲NPO法人海老名ガイド協会 古道・石仏部会の皆さん(茅ヶ崎市の庚申塔前で)

「庚申塔」のいわれ

「庚申」とは、十干十二支(※)を組み合わせた年月日の数え方のひとつで、「かのえさる」または「こうしん」と読みます。

古代中国の道教では、60日に一度巡ってくる「庚申の日」の夜、人間の体内に生まれた時からいるとされる「三尸」という虫が睡眠中に体内から抜け出し、人の生命をつかさどる神、天帝にその人の悪行を告げ、天帝からその罪に応じて寿命を縮めるなどの罰が下されるため、子孫繁栄や大願成就が成されないとされていました。そのため、「三尸」が抜け出さないよう、「庚申の日」の夜に徹夜で語り明かす風習が行われるようになりました。

これは平安時代が起源といわれており、室町時代には一般庶民の間の民間信仰の二つとして「庚申待」、さらに後には「庚申講」として広まってきました。講を行う集団を「庚申

も確実なことは分かっていません。「庚申塔」は信仰石造物の中でもバラエティーに富んでいるため、分からないことが多いのが現状です。

道しるべ

「庚申塔」は主に路傍に造立されていることが多く、道標の役割を兼ねているものもあります。市内にも「江戸」「藤澤」「八王子」「あつ木」「大山」などの文字が確認でき、道の辻などに現存するこのような「庚申塔」が25基あります。

講中」といい、講を3年18回続けると「三尸」が減るといわれたことから、これを続けた記念に天寿全うなどの願いを刻んで造塔したものを「庚申塔」といいます。

※十干十二支…「甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸」の十干と、「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥」の十二支を順次組み合わせた60個の序列。

「庚申講」は庶民の娯楽に

「庚申講」は時を経るにつれ、徐々に信仰の意味合いが薄れていき、庶民の娯楽としての要素が強くなっていったようです。「庚申塔」の造塔は江戸時代に入ってから急増し、明治期頃までは市内でも多くみられました。

現在、市が確認している市内の「庚申塔」は約80基で、そのうちの28基に猿が刻まれています。

猿との結びつき

「猿がついていけば、まず庚申塔と違って間違いない」といわれるほど、多くの「庚申塔」には猿が刻まれており、その多くは「見ざる・言わざる・聞かざる」の三猿です。庚申塔と猿の結びつきには諸説あり、現在

「庚申講」のいま

市教育委員会発行の『海老名の庚申塔』(P7参照)には、下今泉と国分南で講の様子を聞いた記載があります。同書は「現在も庚申講をやっている地域をご存じの方は是非お教えいただきたい」と文末で結ばれており、その後、市内でまとめられた資料はありません。ことし最初の「庚申の日」は2月8日(月)。今に残る「庚申塔」こそが、海老名でも「庚申講」が生活に根付いていたことを、私たちに伝えてくれています。

温故館でも

1月4日(月)～31日(日)、郷土資料館「海老名市温故館」で国分地区の庚申塔に関するミニ展示を行います。ぜひご来館ください。



国分南1-6-36 ☎(233)4028
開館時間：9時～17時15分
1月3日(日)まで休館